

# 古典文学の POPULARIZATION

## —江戸時代庶民文芸の再評価—

山下 則子（国文学研究資料館・教授）

### 1. 「ぼくらのヒーローは古典から生まれた！」

まとまらない話になると思うのですが、2015年11月5日にやらせていただきました、文科省での小学生対象の実践例報告と、そして、そこから少し私が感じたことという、非常に他愛もない話をさせていただきます。久保木（秀夫）先生、入口（敦志）先生のように、和本のいろいろな種類を教えたりとか、そういう重厚な話ではございません。ただ小学生に興味を持ってもらいながら、どうにか古典に近づいてもらおうという、それだけの話でございます。

最初に2015年11月5日に行いました「ぼくらのヒーローは古典から生まれた！」という、八王子みなみ野君田小学校6年生120名、60名対象の授業をして、その後また60名の授業をするという形式での120名ですが、それを一応再現したいと思います。

まずこの『NARUTO-ナルト-』（岸本斉史作画・集英社）という作品なのですが、皆さんご存じでしょうか。私は全く知りませんでした。今回は、文科省で小学生対象の話を『NARUTO-ナルト-』を使ってやるように、しかも『児雷也豪傑譚』と絡めてやれという、大変限定された企画のお話でした。私は安倍晴明が題材の草双紙の話をしようと思っていたのですが…。しかし、これもいい機会だと思って、ご担当の田中大士先生が漫画本72巻を用意してくださいましたので、1週間ぐらいかかってそれを一生懸命読みました。その内容は、木ノ葉隠れの里の忍術学校の問題児だったナルト、それはこの漫画の主人公です。その友人にサスケという優秀な忍者がいます。ナルトはサスケや女忍者サクラとともに、忍者の検定試験である中忍選抜試験を受けるのです。その試験の途中で、大蛇丸おろちまるというヘビみたいな悪い忍者の襲撃を受けます。数々の試練によって成長していくナルトたち。しかし、サスケは大蛇丸の力を求めて去っていくという、そういう発端の話です。

これがその72巻のうちの幾つかの表紙なのですが、金髪で髯のあるナルトは、少し人間離れた感じがします。これは要するに、ナルトには金毛九尾の狐のチャクラというエネルギーが秘められているからなのです。ナルトの意識が薄れると、金毛九尾の狐が現れて、ナルトは無意識にもものすごいエネルギーを出すのです。

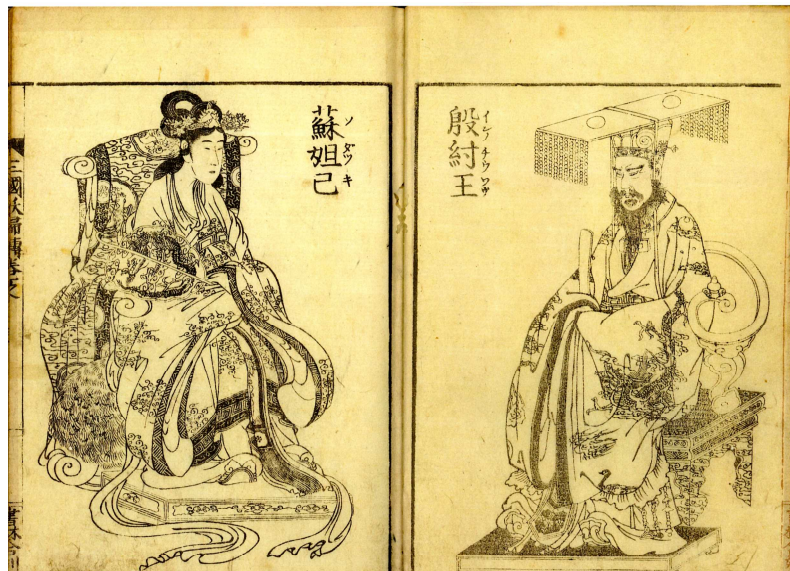
### 2. ナルトと古典文学 その1

ナルトには金毛九尾の狐のチャクラ即ちエネルギーが封印されていました。この金毛九尾の狐とは、早くは謡曲の『殺生石』とか、中国の歴史もの小説『通俗列国志』（宝永2

年・1705・刊、『通俗武王軍談』とも)に出てきますし、写本『悪狐三国伝』、そしてそれらを集大成した読本『絵本三国妖婦伝』(文化元年・1804・刊、高井蘭山作、蹄斎北馬画)とか『画本玉藻譚』(文化2年刊、岡田玉山作画)が、江戸時代の終わりに大変流行いたしました。読本とは挿絵入りの小説で、『絵本三国妖婦伝』は江戸、『画本玉藻譚』は上方で出された類似内容の読本です。実は『画本玉藻譚』のほうが先に企画されて、江戸でその情報を仕入れて先に出してしまったのです。現在でしたら著作権問題になりそうな事件があったのですが、とにかく江戸と上方でほぼ同時に出されました。この『絵本三国妖婦伝』の中の金毛九尾の狐の話は、『NARUTO-ナルト-』とは全く違う話です。『絵本三国妖婦伝』のあらすじは以下の通りです。

金毛九尾の狐が中国・殷の紂王ちゆうおうの後、姫だつきに化けて、紂王に残酷な悪逆を行わせるが、周の武王に滅ぼされ、九尾の狐は逃げ去る。天竺(インド)に渡り、斑足王はんぞくおうの後、華陽夫人に化けて、斑足王に悪逆を行わせる。しかし仏教の力で正体を顕し狐は飛び去る。そして、日本に渡り鳥羽法皇の後、玉藻前たまものまえに化けるが、身体から光を放ち、法皇が病気になるため、その正体が顕れる。九尾の狐は宮中から飛び去るが、命令を受けた三浦之助かずきのすけ、上総之介が那須野の原で狩りをして退治する。その後、那須野の原では殺生石となった九尾の狐が、通りすがりの人や獣を殺していたが、玄翁和尚げんのうに祈られて成仏するという話です。

この『絵本三国妖婦伝』は読本で、挿絵がたくさん入っております。口絵の殷の紂王と姫だつきです(図1)。この姫に金毛九尾の狐が取り憑くのです。挿絵を見ながらもう一度読本の内容を追っていきたいと思います。



(図1)

読本の最初の部分には、登場人物の肖像画があります。これは読本の特徴です。金毛九尾の狐が、殷の紂王に嫁入りする姫だつきを殺して姫だつきに化けます。そして狐が化けた姫だつきが紂王をそそのかして、悪逆非道な行いをさせます。そのために紂王は周の武王に殺されて、九尾の狐の霊は姫だつきの体を離れて、天竺(インド)に行き、そこでも同様に悪事をさせたので、仏教の力で退治されます。日本に逃げてきた九尾の狐は、鳥羽法皇の妃の1人である玉藻前に化け、闇の中で体が光ったり、法皇が病気になることがあります。占い師に占わせたところ九尾の狐の正体が分かり、占い師の術で追い払います。九尾の狐は京都の御所から飛び去ったのですが、その後関東の那須野でさまざまな不思議なことが起こったので、武士の三浦之助・上総之介は命じられて九尾の狐を退治します。ところが、この九尾の狐の執念は退治された後も残り、石になって通りすがりの人や獣を殺すので、殺生石と呼ばれ

ます。しかし玄翁和尚の祈りで成仏します。

このように古典文学の金毛九尾の狐は、『NARUTO-ナルト-』の九尾の狐とは全く違うのです。一番大きな違いは、古典の九尾の狐は妃に化けて権力者である王にさまざまな悪逆をさせたという点です。九尾の狐は悪女に化けるのです。そして、実際に悪いことをするのは権力者である王なのです。

### 3, ナルトと古典文学 その2

古典文学を題材としたものが『NARUTO-ナルト-』にはもう一つあります。この表紙がそのヒントです。これは大蛇丸、綱手姫、児雷也です。そして真ん中にあるのが、うずまきナルトです。そして、これは綱手姫と児来也と大蛇丸が、それぞれ何かをしている所ですが、「三すくみの攻防」と書かれています。そして、「蝦蟇、蟒蛇、蛞蝓」と書かれています。これは何なのでしょう？ こちらの図では、蝦蟇と蟒蛇と蛞蝓が見つめ合っていて動かない様子が描かれています。この『NARUTO-ナルト-』と古典文学の関わりその2は、ナルトの師匠である児来也と、五代目火影つまり忍者村の頭領ですがその火影である綱手と、大蛇丸という悪役の忍者が、それぞれ蝦蟇つまり大きなカエル、蛞蝓、蟒蛇の妖術を使うという点にあります。

中国の我が来也という盗賊の話をもとにした読本『自来也説話』(文化3～4年・1806～07・刊、感和亭鬼武作、蹄斎北馬画)を基にして、それが合巻という、絵と文が一緒の画面に書かれる江戸時代後期から明治になるまで続いた『児雷也豪傑譚』(天保10年～明治元年・1839～1868・刊、美図垣笑顔他作、歌川豊国他画)に影響を与えて、この「三すくみ」の形が作られ、ナルトに利用されたのです。

この合巻『児雷也豪傑譚』は、あまりにも長編のために分かりにくいあらすじですが、ごく簡単にその内容を説明します。

肥後(熊本県)の豪族、尾形氏の子である周馬弘行は、信濃(長野県)に逃れて奉公をしていたが、やがて義賊・児雷也となる。児雷也は妙香山中で、蝦蟇の精霊である仙素道人から、大蝦蟇の妖術を授かる。尾形氏の関係筋である木の葉の里の(木の葉の里は、『NARUTO-ナルト-』にも出てくる)怪力の美女綱手(『NARUTO-ナルト-』でも綱手は怪力の美女)は、越中(富山県)立山の蛞蝓仙人(蛞蝓はナメクジという字)から、武芸と妙術を習得し、児雷也を探し求めて放浪する。越後の池に住む大蛇と武士との間に生まれた大蛇丸は悪い盗賊となる。大蛇丸は月影家の田毎姫に恋をし、そのために田毎姫は病気になる。この病気を治すには蛞蝓丸という名剣の短刀を必要とするので、児雷也・綱手・大蛇丸はそれぞれ蝦蟇・蛞蝓・大蛇の術で「三すくみ」となって戦う。

このようにずっと戦い続けていて、結局未完のまま終わってしまったのです。そうした「終わらない形式」は、江戸時代後期～末期の様々な作品、例えば『膝栗毛』のような作品についても指摘されています(注1)。

この図は『児雷也豪傑譚』の口絵で、大蛇丸と綱手と児雷也がそれぞれ大蛇・蛞蝓・蝦蟇に乗ってにらみ合っている図です(図2)。ここに「綱手 後児雷也の妻となる」と書かれています。原作の合巻では、綱手は児雷也の妻となります。『NARUTO-ナルト-』では



児雷也は綱手にいつも振られて殴られている設定なのです。だから、「実は元の話では結婚して奥さんになった」というと喜ぶのですね、小学校6年生の特に女の子が。そして、児雷也が仙素道人から授かった大蝦蟇の妖術で、尾形家の系図を奪い取って逃げるところ、そして、これは大蛇の口を引き裂こうとする大力の綱手。「三すくみ」関



(図2)

係なので、蝦蟇は蛇に弱いけれども、蛞蝓は蛇に強いので、蛞蝓を遣う綱手姫は、元の話ではいつも児雷也を助けているのです。『NARUTO-ナルト-』では、綱手は看護する人です。傷ついた忍者に優しくエネルギーを補強するという術を持っている忍者です。だから、強くなくて血が怖かったりする設定ですが、原作の合巻では、恐らく読者の多くが女性であったので、児雷也を助けて、大蛇の口を引き裂いたりするような強い女性です。大蛇丸は母が大蛇であり、その性質を引き継いだ悪賊です。児雷也をいつも狙っていますが、それも「三すくみ」関係が影響しているのです。綱手が児雷也を助けるのは、綱手は児雷也の家来筋に当たりますし、児雷也に恋をしているためですが、話の構造から言うと「三すくみ」を表しているからなのです。それが『NARUTO-ナルト-』とは違うところです。

#### 4. 版本書誌学への視点と虫拳

書誌学的な話も少ししました。合巻『児雷也豪傑譚』本文のこの場面は(図3)、諸国を旅している綱手が児雷也を最初に見初めたところです。諸国遍路の柄杓を持って蛞蝓に乗っている綱手ですが、この場面が美しい役者絵にもなっています。合巻の場面と、役者絵とは類似しているけれど、どこか違うところがないか問いかけました。蝦蟇の位置が違うし、子どもが省かれていると回答がありました。役者絵というのは、歌舞伎のある場面を基につくられたもので、人気役者が目立つように描かれます。合巻人気にあやかり、嘉永5年(1852)に歌舞伎『児雷也豪傑譚話』が上演されたので、その時の児雷也役であった八代目市川團十郎の似顔絵になっています。こちらの綱手は、その時に綱手を演じた八代目岩井半四郎の似顔絵です。役者絵では人気役者と関係ないものは省略いたします。

同じ場面は合巻の表紙にも使われていて(図4)、さっきの本文場面との違いを聞くと、

すぐに「ナメクジに乗  
7  
っていない」と回答し  
ました。次に同じ表紙  
で版次の異なるもの  
を見せて、その違いを  
聞きます。最初は全然  
分かりません。しかし  
「この袴の柄はどう  
ですか」等、視点を  
提示します。「こっち  
のほうが模様が多い  
でしょう」とか、「こ  
っちは袴が無地だし  
、よく見ると色も少  
ないでしょう？ じゃ  
あこれはどっちが先  
か分かるかな」と聞  
くと、だんだん分か  
ってきて、「国文研に  
あるほうが悪いんだ  
ね」とか正解を言  
います。一度刷り込ま  
れると、版本を見る  
目ができるのです。  
子どもは、恐ろしい  
ものです。合巻の表  
紙は多色刷りで、上  
下合わせて一つの  
絵になっているとか  
、何冊もつながっ  
て一つの絵になって  
いる表紙もある等  
の話もしました。興  
味を持って聞いて  
くれました。



(図3)

「国文研にあるほう  
が悪いんだね」とか  
正解を言います。一  
度刷り込まれると、  
版本を見る目ができ  
てくるのです。子ど  
もは、恐ろしいもの  
です。合巻の表紙は  
多色刷りで、上下合  
わせて一つの絵にな  
っているとか、何冊  
もつながって一つの  
絵になっている表紙  
もある等の話もし  
ました。興味を持  
って聞いてくれました。



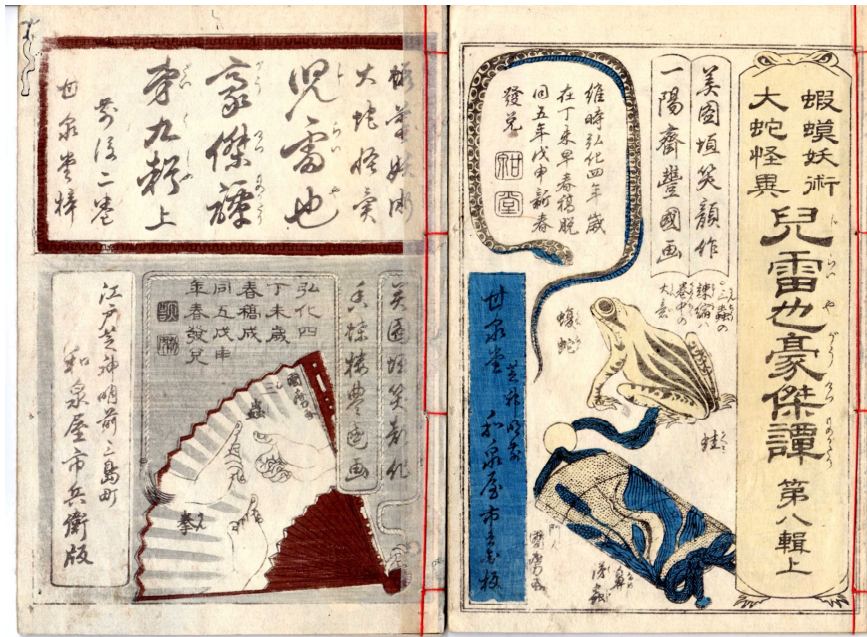
(図4)

書袋の話もしました。

この本は汚れてしま  
うと困るし、勝手に  
読まれると困るから  
こういう袋に入れて  
売らされていたんだ  
と。袋もただ白だけ  
では面白くないから  
、素敵なデザインが  
あったと。この本  
の話に関係のある  
絵を上手にデザイン  
化しているのですと  
。この左の書袋デザ  
インの中で(図5)、  
『児雷也豪傑譚』に  
関係しているのがど  
こかと聞くと、分か  
らないわけです。扇  
中の図が虫拳になっ  
ているのです。



虫拳というのは、蛇と蛙と蛞蝓で行う、日本一古いじゃんけんです。蛇は蛙に勝つ、蛙は蛞蝓に勝つ、蛞蝓は蛇に勝つという、今のグーチョキパーです。でも、ここで一番不思議なのは、なぜ蛞蝓が蛇に勝つのかということです。「虫拳」をネットで調べると、なぜ蛞蝓が蛇に勝つのかという疑問が数多く提出されていて、それに対するいろいろな回答があつてなかなか面白いのです。



(図5)

間が数多く提出されていて、それに対するいろいろな回答があつてなかなか面白いのです。

## 5. 「三すくみ」への疑問

私はなぜ蛞蝓が蛇に勝つとされたのかを調べました。元々の「三すくみ」は中国では蛞蝓ではなくて蜈蚣むかでだったのです。中国では蜈蚣が蛇を食べるとされていました。日本に「三すくみ」が渡ってきたときに、蜈蚣がなぜか蛞蝓に変化してしまったのです。中国の類書、百科事典である『事文類聚』の虫の部に蛙も蛇も出ています。だから蛙も蛇も虫偏です。蛙も蛇も、昔は虫だと思われていたのです。「蛙」の項目に、「蝦蟇と蜈蚣と蛇の三つがお互いに恐れて動けなくなる」ことがあり、「蛇」の項目に、「蜈蚣に小蛇が食べられること」が書かれています。

ところで、この類書『事文類聚』は中国宋代の百科辞書で、いろいろな古典から例文を引用しているのですが、私は「蜈蚣が蛇を食べる」ことと「三すくみ」が書かれている、最初の中国の本に興味を持ちました。かなり早いものは、紀元前 4 世紀頃の『莊子』に出てくるのです。その中の「齊物論」に次のようにありました。「民は芻豢そうかんを食し、麋鹿は薦せんを食し、螂且ろうしよは帯を甘しとす」と。意味は、「人は家畜を食べ、トナカイは草を食べ、蜈蚣は蛇を好み」ということです。『莊子』は、いろんな喩えで自分の意見を説明するので、これも「仁義とか是非は、それぞれの立場で判断しているのだ」ということの喩え話なのだ。その喩えとして蜈蚣は蛇を甘いと思って食べると使われているということです。このように紀元前 4 世紀、つまり今から 2415 年ほど前に、既に蜈蚣は蛇を食べると書かれているのです。

そして、蝦蟇と蜈蚣と蛇の三すくみについては『関尹子』かんいんし（周代、紀元前 10 世紀成立か。ただし唐代 600 年～ 900 年の偽物という説もあり）という本にも出てくるし、そして、『本草綱目』ほんそうこうもく（中国、明代、李時珍編、1590 年成立。日本には江戸時代初期に伝来し、何

度も和刻本が作られる)に出てきます。『本草綱目』蝦蟇の項目に、「蝦蟇や青蛙は蛇を恐れる。しかしながら、蜈蚣を支配する。三物(蝦蟇・蛇・蜈蚣)が出会うと皆よく動けなくなる」と書かれています。どちらにしても、中国のかなり早い時代から、「三すくみ」は文献に出てくるのが分かりました。

このように、『NARUTO-ナルト-』には古典文学に出てくる金毛九尾の狐の話が、古典の原作とは全く違う形で利用されています。そして、古典の『児雷也豪傑譚』の「三すくみ」を、少し変化させながら利用されていたことが分かりました。そして、最後に虫拳をみんなでしました。虫拳は、どれがグーでもチョキでもパーでもいいのです。一応蛇をグーとして、蛙をチョキとして、蛞蝓をパーとして、最初にグーチョキパーの指の練習して、それで隣の人と虫拳でじゃんけんをして、これからも古典に親しんで下さいという感じで終わったのです。

## 6. 若年対象講義を終えて

この若年層対象講義というのを経験して、いろいろ感じるころはあったのですけれども、研究者、学者といえども、自分のプレゼン能力を育成する必要があるだろうと思いました。しかし特に小学生対象というのは、高校生対象とはちょっと違うわけで、かなりハードルは高いと思われます。私は小学校課程も含めた教員養成大学を出ておりますけれども、大学で言われたのは、相手の目線に立って物事を考えろということです。教育実習では、小学生相手の場合は同じ背丈までしゃがみ込まないといけないと、何度も言われました。相手と同じ高さに顔を置いて話すというのは、物の見方を相手に合わせて設定してみることの比喻でもあります。それは強く言われたことです。

それから人前で話す時には、明確な発音・聞き取れる早さで話すことは、最も基本事項です。これは演劇の役者の訓練に通じると思うのですが、そして私自身がやっているわけではないのですが、「あえいうえおあお、かけきくけかかこ」という発声練習をしながらスロージョギングをするというような、肉体鍛錬をするぐらいの気持ちになったほうがいいと思います。加えて、講義のときに体を不必要に動かさないことは、これが結構難しいことです。発表者は自分の緊張を和らげようと体を動かしがちなのですけれども、受け手にはそれは集中を妨げる不必要な動きになります。そして一方的に講義するばかりではなくて、享受者にも参加させ行動させることが必要だということです。ただ、これは何年も実際にやってみないとできないことだと思います。これらの実践的なことを、この研究会の場で申し上げてもあまり有意義ではないと思われるので、むしろ、研究的方面からの提言として、以下のように考察しました。

## 7. 若年層と古典

現在、言うまでもなく古典は危急存亡の秋を迎えております。ですから、多くの人々に関心を持たれることが、古典研究の側の最重要課題になると思われます。やはり、今までの古典文学研究には、少しポピュラリティーを軽侮する傾向があったのではないでしょう

か。上層社会のステータスとしての古典文学、そうした文学研究に偏って、庶民文芸は研究するに値しないとしたことが、現在、一般社会から興味を持たれなくなってしまった原因ではないかと思うのです。古典は江戸時代から本格的に、学問対象として再発見されたものなのであって、江戸時代における古典の受容や理解のされ方などを、もっと視野に入れなくてはならないのではないかと、研究的な方面からは思います。

江戸時代庶民文芸、特に私が専門とするような草双紙の教材化というのは、今までも取り入れる試みは数例なされております。初期草双紙を若年層対象教育に取り入れる試みとして、黒本『寺子短歌』(宝暦 12 年・1762・刊)という、寺子屋での児童の生活を短歌にして紹介するような、大変微笑ましい作品とか、赤本『鬼の四季あそび』(寛延元年頃・1748・刊か)という、江戸時代の四季の行事を鬼がやっている絵の面白さとか。そういう初期草双紙を主に高校生の古典教材として利用して教科書にも取り入れられたことがあったようです。ですけれども、これはあまり定着しなかったのです。その原因としては教員になじみのない教材だからであろうといわれております。

また、東京学芸大学大学院で、40 年近く刊行している学術雑誌『<sup>そう</sup>叢』37 号(2016 年 2 月)に載る実践例として、佐藤智子先生の「小学校における草双紙作品の教材活用について」では、小学生対象に草双紙を教材化する試みが紹介されています。最初に昔話もの、例えば『桃太郎』とか『花咲か爺』とかを用いて導入後、故事成語やことわざにちなんだ作品をやり、そして昔話ものを使用して変体仮名に親しませるという段階で教育する方法や、1 年生などの低学年へは草双紙を紙芝居にしたもの。赤本『化物よめいり』(化物による嫁入り次第もの)等を見せて読み聞かせとか塗り絵を実践した例が報告されています。

私は、江戸時代庶民文芸の中の古典に注目した場合、現代の古典教育に取り入れるときには、その内容を選択すべきだと思うのです。最初は昔話ものから導入したとしても、その次は古典を絵画化したものにするべきではないかと思うのです。先ほどの『寺子短歌』『鬼の四季あそび』は、草双紙作品としては面白いけれども、当時の子どもの生活や江戸時代の風俗の教育になってしまうので、教員は何を教えるのかを把握しにくいと思うのです。ですから、例えば『百人一首』とか『伊勢物語』『平家物語』、そして、中国の故事格言の説話ものとかで、絵画を伴いながら古典の面白さや優れた日本の文章、興味深い日本の歴史に触れさせる方向で展開したほうが、若年層に古典を効果的に教えられると思うのです。

ですから私は、江戸時代中期頃までの上方絵本を教材化することを提言します。上方絵本とは京都・大阪で主に出版された庶民対象のものです。今まで紹介した初期草双紙は、江戸での出版物で、上方絵本は少し時代的には前になります。若干、絵の描き方も異なり、西川祐信などを中心としています。そして上方絵本は古典を題材とするものが多いのです。つまり庶民に古典を普及させるのに効果的だった作品群です。ですから、私としては上方絵本の教材化や、その教育方法の模倣を提案したいと思います。

## 8. 上方絵本の中の古典

上方絵本の中の古典ということで例を挙げます。『絵本徒然草』(西川祐信作画、元文 3 年・1738・序)です。兼好法師がこの庵いおりの中で「ひとりともしびのもとに文を広げて、み



ぬ世の人を友とするこそ、こよなふなぐさむるわざなれ」とだけ書いてあります。こちらも『絵本徒然草』で、「仁和寺の童、法師にならんとする名残とて各あそぶ事有けるに、酔て興に入り、あしがなへを取てかしらにかづき」とあります(図6)。この文章は途中までです。だから、酒宴の席で足鼎を被り、無理やり取って鼻や耳が損なわ



(図6)

れた話しの途中までなので、「この先どうなると思う?」と聞いてもいいと思うのです。こういう悪ふざけをすると、予想も出来ない悲惨なことも起こるといことです。文章のみでは文法などにとられ、イメージできないと思うのです。やはり内容が図示されていると、とてもイメージしやすいし、興味深い教材になると思うのです。

次は『絵本小倉山』(西川祐信作画、寛延2年・1749・刊)中の天智天皇「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わか衣手は露にぬれつつ」です。この絵は江戸時代の耕作風景がそのまま描かれているだけで、歌意を絵画化したわけなのです。それでも具体的なイメージが湧いてくると思います。紀友則「久かたのひかりのどけきはるの日に、しづ心なく花のちるらん」です。そして歌の意味が



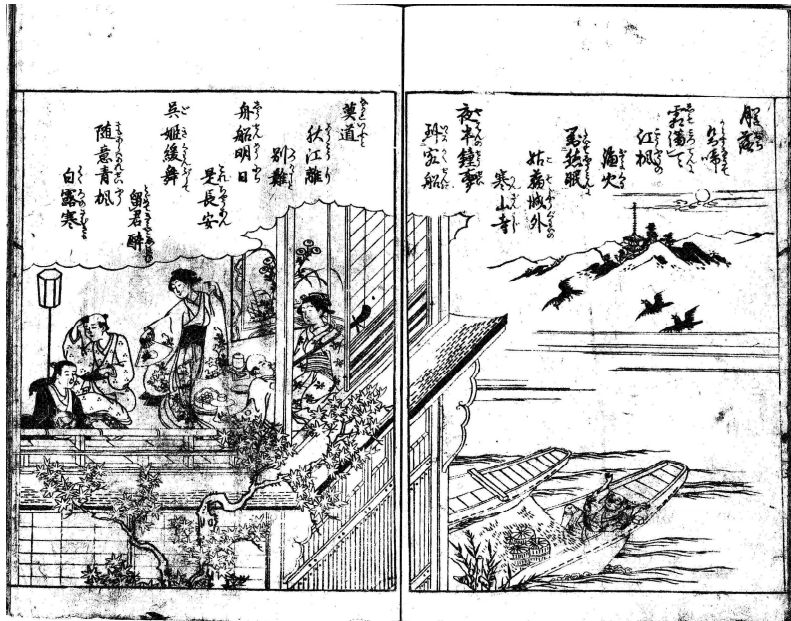
(図7)

あります(図7)。注意していただきたいのは、この絵が江戸時代の風俗で描かれていることです。当時百人一首を庶民に広める意図をもって絵本を作るときには、当世化して描くことが多いということです。それを「やつし」とも表現します。恐らく身近な風俗で描いたほうが、古典の内容に興味を持つからだと思うのです。実感を伴ってこの和歌を身近に感じられるからです。だから、こういう当世化・やつしの手法は、非常に多く用いられています。それは一つの示唆だと思います。

他にも『絵本唐詩仙』(五瀬幸呂山逸人序、宝暦2年・1752・序)で「月落ち烏啼きて霜天に満つ、江楓の漁火愁眠に対す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘声客船に至る」(図8)。

張継の「楓橋夜泊」です。それも船頭が伸びをしていたり、カラスが飛んでいたりする江戸時代風俗で描かれているのです。庶民に古典を親しませるために、江戸時代では絵画化と当世化の手法を多用したことが見て取れるのです。

江戸時代庶民文芸の中の古典ということ考えてみると、江戸時代庶民文芸は古典を規範としています。庶民文芸は卑近な



(図8)

面もありますが、古典を大変大切にしています。ですから、古典を規範としながら、それをいかに庶民に受け入れやすくするかの工夫がなされています。江戸時代のこの工夫をある程度参考にするとよいと思います。古典文学を絵画化して文章とともに鑑賞する。そして、古典文学を当世化・やつして鑑賞する。その作品の文学性が高ければ、当世化した絵画でも十分に内容は伝わります。しかも文学性の高い作品、つまり名文とか伝統的な美意識に支えられた作品や人生訓的な内容の作品を選択して、初学者に古典を学ぶ意義を自覚させるのです。また、江戸時代の作品の中には、人心を捉える魅力のある作品もあります。例えば奇談ものとか裁判ものとか恋愛ものです。これらは現代文であれば、今でも大変面白いのであって、まだまだ発掘すべき古典作品はたくさんあるのです。

今回、田中大士先生が示唆してくださったこの『NARUTO-ナルト-』の中の古典文学なのですけれども、漫画やアニメーションが導入だと小学生には身近なので興味を持ちますし、その背景に古典があると分かると、彼らは古典にも興味を持ちます。関連していれば、それこそ『荘子』や『本草綱目』の話をして熱心に聞いています。ですから、興味を持たせる工夫が一番大切なのではないかと思うのです。そして、近世上方絵本が庶民の古典受容のために行った工夫が、若年層の古典教育には大きな示唆を与えるのではないかというのが今回の提言です。

(注・図版)

注1, 浜田啓介「滑稽本」総説。『鑑賞日本古典文学 洒落本・黄表紙・滑稽本』(角川書店、昭和53年・1978・刊)所収。

- 図1 『絵本三国妖婦伝』 個人蔵
- 図2～5 『児雷也豪傑譚』 国文学研究資料館蔵 ナ 4-143 DOI 10.20730/200004063
- 図6 『絵本徒然草』 国文学研究資料館蔵 タ 5-66-1～3 DOI 10.20730/200002195
- 図7 『絵本小倉山』 国文学研究資料館蔵 松野 54-176 DOI 10.20730/2000013588
- 図8 『絵本唐詩仙』 国文学研究資料館蔵 ナ 4-302 DOI 10.20730/200005590